

## 幼児の偏食と母親の食教育との関連

○木田春代<sup>\*1\*</sup>, 武田文<sup>\*1</sup>, 門間貴史<sup>\*3</sup>, 朴 峠 周子<sup>\*4</sup>, 浅沼 徹<sup>\*1</sup>, 藤原愛子<sup>\*1</sup>,

香田泰子<sup>1</sup> (<sup>\*1</sup>筑波大学大学院人間総合科学研究科ヒューマン・ケア科学、<sup>\*2</sup>天使大学看護栄養学部栄養学科、<sup>\*3</sup>筑波大学大学院人間総合科学研究科体育学、<sup>\*4</sup>人間総合科学大学人間科学部人間科学科)

**【背景】**平成17年度乳幼児調査によると幼児の偏食を訴える保護者の割合は34%であり20年前の約2倍に増加している。これまで幼児の偏食と食事のテレビ視聴など家庭における食教育との関連が報告されているが、1つ1つの食教育との関連性について述べたものがほとんどである。

**【目的】**幼児の偏食状況を明らかにするとともに、母親が行っている食教育を同時に取り上げ、幼児の偏食との関連性を明らかにする。

**【方法】**2008年9月、A県公立幼稚園15か所の園児の保護者1145名を対象に無記名自記式質問紙調査を行った。質問項目は①属性、②幼児の偏食（「お子様は嫌いなものや苦手なものがあった場合、その食べ物を食べますか」の質問に「食べる」「どちらかといえば食べる」「どちらかといえば食べない」「食べない」で回答）、③幼児に対する食教育（「食べ残しをしないように言っている」など19項目に「よくあてはまる」「まああてはまる」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」で回答）とした。回収数794部（回収率69.3%）のうち、幼児の食事作りを主に母親が担当し、幼児の偏食に回答のあった757名（有効サンプル数66.1%）を分析対象とした。各項目について単純集計を行った後、幼児の偏食（「食べる・どちらかといえば食べる」=0、「食べない・どちらかといえば食べない」=1）を従属変数、幼児に対する食教育19項目（「よくあてはまる・まああてはまる」=0、「あまりあてはまらない・まったくあてはまらない」=1）を独立変数とするロジスティック回帰分析を行った。

**【結果】**幼児の偏食への回答は「食べる」6.6%、「どちらかといえば食べる」28.4%、「どちらか

といえば食べない」50.3%、「食べない」14.7%であった。幼児の偏食との関連があった項目は「食べ残しをしないように言っている」（OR=7.19, 95%CI: 2.19-23.65）、「家族全員が同じメニューを食べる」（OR=3.23, 95%CI: 1.41-7.41）、「子どもの嫌いなものや苦手なものも食事に出している」（OR=2.82, 95%CI: 1.43-5.55）、「食事の時間はテレビを消す」（OR=1.63, 95%CI: 1.18-2.24）、「食事作りを手伝わせている」（OR=1.41, 95%CI: 1.02-1.93）であり、母親がこれらの行動をとらないことが幼児の偏食のリスクを高めていた。

**【考察】**「食べ残しをしないように言っている」の項目で最もオッズ比が高く、幼児の偏食予防の上で母親からの言葉がけが最も重要である可能性が示唆された。また「家族全員が同じメニューを食べる」「子どもが嫌いなものや苦手なものも食事に出している」「食事作りを手伝わせている」「食事の時間はテレビを消す」の項目も幼児の偏食と有意な関連が見られたことから、家族全員が同じ食事を食べること、手伝いや会話などを通して食べ物に興味や関心を持たせ、食事に集中できる環境を整えることが大切である可能性が示唆された。

**【結論】**幼児の偏食予防の上で、母親からの言葉がけが最も重要であり、大人と同じメニューを用意し、食べることに興味・関心を持たせ、食事に集中できる環境を整える必要性が示唆された。

(連絡先) 木田春代 筑波大学大学院人間総合科学研究科ヒューマン・ケア科学専攻

E-mail ; haruyo.k@hcs.tsukuba.ac.jp